

『源氏物語』における「おぼつかなし」考 — 薫から浮舟へと引き継がれる存在不安を繋ぐ感覚

斎藤 由紀子

一. 本稿の目的—『源氏物語』薫詠の位置づけ

薫が自らの出生について、どの程度の疑惑を持ってきたかは、多くの薫論において見解が述べられてきた。まずは、匂宮巻で、薫自身が、その秘められた屈託を述べている部分に沿って、問題点を整理してみたい。

A 幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなう思ひわたれど、問ふべき人もなし。宮には事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいたき筋なれば、世ととももの心にかけて「いかなりけること」には。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出けん。B 善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな。」とぞ独りこたれたまひける。

おぼつかな誰に問はましいかにしてははじめもはても知らぬわが身を

答ふべき人もなし。事にふれて、C わが身につつつがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌やつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく、D 思はずなりける事の乱れに、かならずE うしと思しなるふしありけん。(中略 五つの何がしも

なほうしるめたきを、我この御心地を、同じうは後の世をだに、と思ふ。かのF 過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすほほれてや、なほ推しはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、……。

(匂宮巻 五―三―二四頁)

傍線A「幼心地にほの聞きたまひしこと」の内容は、後の傍線C「わが身につつつがある心地」を呼び起こし、母女三宮の尼姿も、傍線D「うしと思しなるふしありけん」E「うしと思しなるふしありけん」と自らの出自に不吉な影を予感させている。後藤祥子氏に指摘されているように、薫の栄達は光源氏の子という出自によるものであって、それが真実でないということが露見すれば現在の地位からの失墜するからである。<sup>1)</sup>

では、傍線F「かの過ぎたまひにけんも」の指す実父が誰であるかを薫がどの程度把握していたか、また、実父に對しどのような感情をもっていたのであろうか。柏木と特定していたとする説の多くは、「むすほほれて」の箇所引用が指摘されている、父柏木遺詠の引歌が意識的になされたものとする。<sup>2)</sup> また、傍線B「善巧太子のわが身に問ひけん悟り」という薫の出生にまつわる引用仏典について研究が

進められてきた。それらは大別して、河内本系統の本文「瞿夷太子」による羅睺羅の引用と見て、父からの疑念を晴らす物語を重ねて読み解くものと、釈尊の前身「善行太子」に想を得て創作された仏教説話における父恋の物語の引用と見るものに整理できる。

本稿では、そうした研究をふまえて、薫の最初の独詠「おぼつかなし」に焦点を当てて薫の出生の秘密が物語にどのような効果をもたらしているかを考えてみたい。

この和歌について、小林正明氏は「自分が自分であることを発問するこの一首は『源氏物語』における実存の極みを表出しえている。」「問題意識の自己表出によって、宇治十帖を推進する起動点たりえている」とされた上で、物語が進むにつれ出生の問題に触れなくなり、実存の探求から「無限後退」していく薫のあり方を指摘された。<sup>5</sup>「はじめもはても知らぬわが身」の部分には「無始無終の道理」(花鳥余情「等」という輪廻転生の果てなき業を説く法文が指摘されている。そこに、薫の出自とそれによって左右されるであろう行く末の不透明さが託されているのである。まさに、自分が何者であったのか、何者になってゆくのか、というアイデンティティの危機が詠まれた歌であるといえよう。

そして、その不透明な事柄への問いかけ「誰に問はまし」は、歌の直後には「答ふべき人もなし」と断ぜられている。とすれば、初句の「おぼつかなし」は、二句目の「誰に問はまし」に掛かるというよりは、危機に瀕した「わが身」への不安を歎いだらうか。

そのために、まずは、薫の実存的不安を象徴すると思われる初句「おぼつかなし」が、いかなる内実をもっていたかということとを、「おぼつかなし」という語自体の文学的背景から探ってみよう。具体的には、和歌および散文における「おぼつかなし」の用例をたどり、薫詠における「おぼつかなし」に込められた出生への疑惑がいかなる方向性と程度その上で、改めて宇治十帖における薫詠「おぼつかなし」の意義・位相を考察する。

## 二 「おぼつかなし」の源流―「藪」の感覚

「おぼつかなし」の語義としては①(景色などが)ぼんやりしてはつきりしない。ぼうつとしてよく見えない。②(対象の様子がはつきりせず)気がかりだ。不安だ。心細い。頼りない。もどかしい。③疑わしい。不審である。また不確かである。④疎遠で相手の様子がわからない。訪れがない。⑤(会わずにいる状態がもどかしい)待ちどおしい。会いたい。「などが挙げられている。共通しているのは、ある対象があって、それに対するもどかしさの感覚である。これを冒頭に挙げた薫

ずる語として冒頭に漢と投げかけられたものと考えた方が良さそう。とすれば、この「おぼつかなし」の感覚こそが、この独詠詠出の核となる感情であったとも考えられる。

以降、薫の出生の秘密が明かされる場面を辿ってみると、

① あやしく、夢語、巫女やうのものはず語りすらんやうにめづらかに思さるれど、あはれにおぼつかなく思しわたることの筋を聞こゆれば、いと奥ゆかしけれど…

(橋姫巻 五―一四七頁)

② げに、よその人の上と聞かむだにあはれなるべき古事どもをまして年ごろおぼつかなくゆかしう、いかなりけんことのはじめにかと、仏にもこのことをさだかに知らせたまへと念じつる験にや、かく夢のやうにあはれなる昔語をおぼえぬついでに聞きつけつらん、と思すに、涙とどめがたかりけり。

(橋姫巻 五―一五九―一六〇頁)

「おぼつかなし」の語が散見する。特に、①では、出生の秘事そのものを抽象化した表現として用いられている。後述するが、冒頭に挙げた句宮巻の場面に用いられた①②の「おぼつかなし」は、薫に用いられた「おぼつかなし」の用例についておくことも必要であろう。

管見の範囲において「おぼつかなし」の語は『万葉集』に遡る。西本願寺本万葉集中、「おぼつかなし」の訓が付されているのは次の三首である。

水鳥之 鴨乃羽色乃 春山乃 於保束無毛 所念可聞

(笹女郎贈二大伴家持一歌一首 一四五五)

春去者 紀之許能暮之 夕月夜 鬱束無裳 山陰尔指天

(二八七九)

今夜乃 於保束無荷 霍公鳥 喧奈流声之 音乃遥左

(一九五六)

月やほととぎすの音が臚であることや、思うに任せぬ恋など、対象へのもどかしさを表現している。

だが、万葉諸本を見渡せば、他にも「藪・藪」等の漢字本文に「おぼつかなし」という訓を付したものが見つかる。

いめにだに 不見在之物乎 鬱悒 宮出毛為鹿 佐日之隈廻平

夢尔谷 不見在之物乎 鬱悒 宮出毛為鹿 佐日之隈廻平 (皇子尊宮舍人等慟傷作歌廿三首 一七五)

朝日照 嶋乃御門尔 鬱悒 人音毛不為者 真浦悲毛

(同 一八九)

春日山 朝居雲乃 鬱 不知人尔毛 恋物香聞

春日山 朝居雲乃 鬱 不知人尔毛 恋物香聞 (中臣女郎贈大伴宿祢歌五首 六七七)

春霞 山柵引 鬱 妹乎相見 後恋霧

(寄霞 一九〇九)

野干玉之 夜渡鷹者 鬱 幾夜平塵而鹿 己名平告

(詠雁 二二三九)

これらの「鬱・鬱悒」は、近世万葉字の示す新訓において「おほほし」に改められている。しかし、『観智院本類聚名義抄』には「悒」の字に「ヲボツカナシ」の訓が当てられているが、「オホホシ」の訓は掲出がない。また、一九〇九番歌は赤人集、二二三九番歌は柿本集に「おほつかなし」という歌詞で採録されており、「鬱悒」は、平安期には「オホホシ」詠も「オボツカナシ」の訓で享受されていたとも考えられる。

新訓によつて「おほほし」に改められていく歌の特徴を挙げるなら、「皇子尊宮

(「八月十五夜魚舊有感」『菅家文章』 三四三頁)

などのように日本漢文にも取り入れられている。故郷を離れた地で亡父を悼む孤独は誰かと共有されるはずのないものであり、司馬遷の他に理解されず屈辱に耐える孤独と通ずる所がある。これらの「鬱悒」は、「自分から隔てられたある対象へのもどかしさ」というよりは、自己のあり方への感情「始めから理解されることを諦めた者の漠とした孤独感」である。そして、それは、「問うべき人もなし」と地の文に断せられる薫のあり方と重なってくる。「おほつかなし」は、訓読された「鬱悒」のイメージから、誰とも分かち合つことの出来ない自己への感覚をも表現し得たのではないだろうか。

むしろ、『万葉集』漢字本文が平安期にどれだけ流布していたかという問題は残るが、その他の漢籍にあらわれた「鬱悒」に託された、他に理解者を持たない孤独感に『源氏物語』作者が触れる機会を持ちえた可能性は残るのではないか。

### 三 平安期和歌における「おほつかなし」——「身」への感覚

拾遺集時代までの「おほつかなし」を用いた和歌二〇三首を調査すると、七八首が恋歌、三六首が景物詠であった。『万葉集』における「おほほし」が言葉として

舍人等慟傷作歌二首に見られるように、疑問は疑問でも、ある対象——仕えてきた皇子の死等——への、より大きな感乱を示す表現として用いられているということであるうか。「おほほし」は、死の不条理やそれに直面した時の大きな混乱を表明する表現であった。それに対し「おほつかなし」は、臆に霞む情景や、はつかに逢つた人への恋心に用いられている。

しかし、小野氏は家持の「鬱悒」の訓の用例を分類された結論として、家持が、訓として「おほほし」を捨て「いぶせし」を採つたという積極的な証しはなく、むしろ「鬱悒」という漢字表記に注目すべきであると述べている。

では、「鬱悒」はどのような感情に用いられている語であっただろうか。司馬遷「報任少卿書」において官刑に処された我が身の有様を述べて述べた一節に

是以獨鬱悒而與誰語 是を以て獨り鬱悒として誰と與に語らん。

(『文選』一六九頁)

「鬱悒」は『万葉集』にのみ採取されたわけではない。管見の範囲内では決して多くの用例を捨てたわけではないが、

従始南來長鬱悒 始めて南に來たりしときよりこのかた長に鬱悒たり

就中此夜不勝悲 なかんづくに此夜は悲しびに勝へず

消えたばかりではなく、それが担っていた、深い迷妄を表現する「おほつかなし」の用例も見受けられない。つまり、「おほほし」と表現されていたものが「おほつかなし」に吸収され一本化されたわけではないのである。これは、恋歌の需要拡大と、死を悼む詠法も感乱の激しさよりも、儀礼性が重視されるようになったためであろう。句官卷の薫独詠は、「おほつかなし」詠の堂套からは逸脱する、物語が必然的に詠ませたものであったといえる。

中で、無常の世における「身」のはかなさに対する感懐として詠まれた「おほつかなし」詠を見てゆこう。

なぐこゑはするものからに身はむなしあなおほつかなつつせみのよや

(定文歌合 九)

わが身またあらじとおもへどみなそこにおほつかなきは影にやはあらぬ

(貫之集 三六二)

さくらの花さかりなるをみてよの中のあはれなる事をおもひて

ちるはなにまたもやあはれおほつかなきそのはるまるとしらぬ身なれば

(永仁本実方集 一〇二)

空蟬や池に映る影、散る桜によせて、「己が「身」の「おぼつかなさ」を詠んだものが数は圧倒的に少ないが存在している。これらと同じ詠法として『蜻蛉日記』にも

くもりよの月とわが身のゆくすゝのおぼつかなさばらばれまされ

(二一九頁)

という一首がある。兼家の訪れが間遠になりはじめた頃、ようやく訪れた兼家に愛情深かった昔を思い出して道綱母が詠みかけたものである。この道綱母の詠に兼家は冗談めかした返歌をするが、それに対し彼女は、

頼もしげに見ゆれど、わが家とおほしきところは、ことになむあんなめればいと思はずにのみぞ、世はありける。さいはひある人のためには、年月見し人も、あまたの子なほおもたらぬを、かくものはかなくても思ふことのみしげし。

(二一九頁)

と時姫の存在を強く意識し、自分の不安定な立場に思い至り物思いに沈んでいく。根来司氏は『蜻蛉日記』の散文に現れる不安を表現する感情形容詞が「おぼつかなし」「はかなし」に偏っていると指摘された<sup>9)</sup>。この指摘を受け、金子真理子氏は、

の「世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂き時はいつち行くらむ(古今集雑下・九五六)」を背景としており、続く部分にはこの歌の引歌表現がある。

『多武峰少将物語』の『源氏物語』宇治十帖への影響は既に指摘がある<sup>10)</sup>。それらは八の宮とその姉妹の描かれ方に関する指摘を主とするが、この歌における「おぼつかなし」の方向性、及び「たれに問はまし」の二句の一致は、『源氏物語』が『多武峰少将物語』の表現そのものを模倣していた可能性をも秘めて注目し値するのではないだろうか。

この愛宮詠に対して、高光室は

まことや、誰に問はましとか。住み給ふ人にこそ、問ひきこえぬ、憂からねばこそ、

流れても君住すむべしと水の上に憂きよかはとも誰か問ふべき

(二七二頁)

と答える。愛宮らの「問うべき誰か」はむろん「住み給ふ人」高光であることは明白なのだが、彼女らの問いに対し、女性達に「あさましきうき世」を感じさせた高光自身は、俗世への絆を断ち切り、心澄まして横川の地に隠棲しているのであるから、結局は、誰か問ふべき」という反語によって、愛宮の「おぼつかなし」という感覚は、誰にも受け止められないことが示される。この部分の表現には、冒頭に引用

兼家は道綱母に対する心配を「おぼつかなし」と表現しているが、道綱母は、そうした相手への方向性を持たず、自己の境涯について「はかなし」を用いていると分析された<sup>11)</sup>。『和泉式部日記』においても、「おぼつかなし」の用例は、九例中六例が宮から女への台詞や手紙に用いられている。それらと見比べてみても、兼家の台詞・手紙に用いられた「おぼつかなし」(六例)は、恋人に無沙汰の間も愛情衰えなかったことを訴える定型表現といえる。対して、先に引用した部分でも道綱母の「くもり夜の…」詠は、兼家への贈歌とはいえ、そこに用いられた「おぼつかなし」は、「我が身」の「はかなし」に回帰してくるものである。

因みに、平安後期から鎌倉にかけての和歌を視野に入れても、これらのように「身」の「おぼつかなし」を詠んだ歌は多くないが、先に挙げた実方の「ちるはなに…」が『詞花集』『後葉集』に、道綱母の「くもる夜の…」が『後拾遺集』『宝物集』『定家八代抄』に詠歌時代から遅れて採られている。

もう一首、『多武峰少将物語』の次の歌は、薫詠を考察する上で外せない。

いづくにもかくあさましき憂き世かはあなおぼつかなし誰に問はまし

(二七二頁)

この歌は、愛姫から高光出家による失意を共有する高光室への贈歌である。生き難い「憂き世」の広がりの中での不安が「あなおぼつかなし」に込められている。躬恒

した句官巻における、和歌の「誰に問はまし」と、続く散文における「答ふべき人もなし」の呼吸と通うものがある。

以上の詠をみると、「わが身」への不安を「おぼつかなし」と詠む薫の独詠は、平安期の「おぼつかなし」詠の規範からは外れているものの、決して唐突に生まれたものではなく、「身」に対する無常詠とひと続きに詠まれたことがわかる。これらのごとくを踏まえて、『源氏物語』における「おぼつかなし」の用例を見てみよう。

#### 四 『源氏物語』正編における「おぼつかなし」——「宿世」への感覚

散文における用例の比較対象として『宇津保物語』における用例の内訳を見ておく。物語中に用いられた「おぼつかなし」一〇〇例、動詞「おぼつかながる」二例、名詞「おぼつかなし」八例を調査すると、際立って多いのは、あて宮の返歌をもらうことのできない求婚者たちのもどかしさを表現するものである。実に二十五例があて宮求婚の文脈で用いられている。また、散文特有の用例として、台詞や手紙の初めに用いられ、無沙汰を詫げる社交的な修辭法として例が用いられていることも確認しておくべきことであろう。長期に及ぶ物語的時間の中で多くの登場人物の複雑な人間関係を描いた物語において、物語の表舞台から引いていた人物を舞台上に挙げ、疎遠になっていた者同士を結びつける語として機能し、頻繁に用いられている。

しかし、父から子への伝授を主題とする物語でありながら、自らの出生い立ちや(例えば、祖である俊陰に対して、その子孫が抱くなど)や数奇な運命に対して抱く感情として用いられたものはない。前節に続き、厭世に関わる例として、あて宮恋慕の迷妄ゆえに仏道の道に入った仲忠の台詞をみて、

「今はかく不用の人になりて、官仕へもせず、まかり歩きもせず、尋ね訪はせたまふ人もなければ、誰も誰も対面賜はること難く、世の中をおぼつかなく思つたまふるに、…」

(沖つ白波二二〇四 実忠から大宮への手紙)

薫のように、「わが身」に遡及する「おぼつかなし」ではなく、単に、自分が「不用の人」となった「世の中」に対する隔絶を述べるに留まる。

『源氏物語』中「おぼつかなし」は二六五例用いられている。二例以上「おぼつかなし」という感覚を抱いた人物とその対象を最終頁の表に示した。多くが、男女が互いに思うように逢うことが出来ない際の不安やもどかしさを表現している。また、先述の無沙汰を詫びる社交的挨拶に用いられているものも多い。この点では、『源氏物語』においても、平安期和歌及び先行散文における「おぼつかなし」の使用傾向から大きく外れてはいない。先に見た『宇津保物語』に比べて目立って多いのは、桐壺帝から光源氏、光源氏から冷泉帝、朱雀帝から女三宮など、親から子

(明石巻 二二―二四六頁)

と答える。自らを流離に陥らせた原因、「横さまの罪」を対象としての「おぼつかなし」という感覚が、入道の「御物語」から前世からの「契り」として氷解したとする源氏の弁は半ば以上社交辞令であった。後に触れるが、明石の入道が夢告の内容を具体的に明かすのは、その表現を見ての後であるし、その表層的原因である政治的事情と己の立場に対して、光源氏自身が無自覚であったはずはないからである。この、源氏と明石一族の「宿世」にまつわる「おぼつかなし」の感覚が再度語りなおされるのは、いよいよその「宿世」の成就する若菜上巻明石女御の若宮出産に際してである。出産に先だって、明石の女御は、祖母の尼君から自らの出自に関わる「御宿世」を聞く。

② げにあはれなりける昔のことを、かく聞かせたまはしかばおぼつかなくても過ぎぬへかりけりと思つてうち泣きたまふ。

(若菜上巻 四一―四四頁)

明石の女御は、続く部分で「かくすこしおぼえ下れる筋と知りながら、生れたまひけむほどなどをば、さる世離れたる境にてなども知りたまはせりけり。(若菜上巻 四一―四五頁)」「とされている。同じ都の内ですこしおぼえ下れる筋である。

に対して、また、明石の君から明石入道に対してなど子から親に対して感じている用例である。

「おぼつかなし」という感覚を持つ頻度として最も多いのは光源氏で、四二例。その対象として最も多いのは紫の上に対してで、幼い彼女を引き取るうと画策する時点に始まり、須磨流離の文脈、御法巻の臨終の場面まで通して九例用いられている。その他、多くの女性達に対し広く用いられている。都から離れ、残してきた人々を思う須磨・明石巻の流離の文脈に多いのも当然であろう。そうしてみれば、逆に父の元を離れ、また娘とも引き離され「山里人」として暮らす明石の君の九例も取り立てていうに値しないかもしれない。

しかし、何らかの事情で隔てられている人物を恋うる意味で用いられるのではなく、自らの運命に対し用いられる用例(次に挙げる①④の四例のみ)も源氏と明石の一族との関わりの中に限定的に現れる。その始発は、源氏の須磨隠棲を、貴顕に娘を奉ずることを願う自分を「神仏の憐れびおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにや(明石巻二二四四)」と思う、と、明石入道に打ち明けられた源氏が、自分の流離の運命について

① 「横さまの罪に当たりにて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。」

と、明石という「世離れたる境」に出自があること異常さの間には少なからぬ差がある。その事実を知らずにいたことに女御は衝撃を受け、「こよなき心驕りをばしつれ。世の人は、下にいひ出づるやうもありつらんかし」と世間への憚りを思い自省する。この反省から考えて、②の引用部分の現実仮想は「できればはつきりと知らずに済ませたかったのに」というよりは、「曖昧なままであったら大変なことであった」と解しておくべきであろう。このような自らの出自をめぐる思考回路は、まさに匂宮巻の薫と重なってくる。実母はともかく、光源氏を父に持ち、帝の寵を受けて出産するという絶対的な基盤をもつ明石女御にしてなお出自の疵は有耶無耶に済まされたいものであったのだから、まして、その光源氏の子であること自体に疑いのある薫は、出生の秘密を探るに相当の心血を注いでいたはずである。そうしてみると、匂宮巻の薫独詠初句の「おぼつかなし」には、譲がかったほんやりとした不安、というよりは、暗闇に一人取り残されたような、一節で紹介した「鬱悒」の感覚を読み取るべきである。

明石女御の感乱はそのまま、その出自の大本を作った祖父入道の「仙人の世にも住まぬやうにてゐたなる(若菜上巻四一―四五頁)」という異様なあり方への不審と一続きに語られる。その入道が、自ら抱えていた「おぼつかなし」の感覚を打ち明けるのは、明石の君に、夢告の表現を告げる文の中である。

③ 「…ただ少しのおぼつかなき」と残りければ、今は、さりとせと仏

神を頼み申してなむ移るひける。…」

〔若菜十卷 四—一二頁〕

「ここでの」おぼつかなき」とは、明石の女御の男子出産を指す。靈夢に賭け、娘を源氏に縁づけて、世を捨てて深山に籠る準備を着々と整えつつも、若宮誕生を確認するまでは、「おぼつかなし」という感覚は残されていたのである。その不安感がようやく満たされて、その夢を託した明石の君、そして明石の女御らに、彼女達が担ってきた「宿世」の全貌が明かされるのである。

また、これを聞いた源氏も

④ 「…この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかと、目の前に見えぬあなたのごときは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さるばるかかる頼みありて、あながちには望みしなりけり、横さまにいみじき目を見、漂ひしも、この人ひとりのためにこそありけれ…」

〔若菜十卷 四—一二頁〕

と、澤標巻で明石の姫君誕生の際、「御子三人」の宿醒勘申を思い合わせつつも、その「目の前に見えぬ」宿世に対し、「おぼつかなし」という感覚を抱き続けたことを回想する。それに続く点線部は①に引用した明石巻の点線部の表現と呼応して

いるようにも見える。須磨流離への「おぼつかなき」は、ここで真の意味で解消されたといえよう。

つまり、こうして並べてみると、『源氏物語』正編に現れた、自らの運命に対する「おぼつかなし」で表現される不安は、ある程度予感を伴う自らの宿世に対して、その予感が実現するかどうかに対して現れるものであったといえる。そして、その予言を受けた入道、それを表現させる当事者の明石の女御、そして光源氏の「おぼつかなき」がそれぞれに解消されることで、明石一族と光源氏の物語は結末を迎えるのである。

先に引用部分②でも触れたが、句宮巻薫独詠「おぼつかなき」も、生まれると同時に負わされた、そして今後も担い続けなければならない「宿世」に対する。源氏や明石一族の「おぼつかなし」の使用状況に照らすなら、それは、ある「予兆」を伴うものであったはずである。薫にとって、その予兆とは「破滅」に他ならない。本稿二節で挙げた「蜻蛉日記」道綱母詠や『多武峯少将物語』愛宮の「おぼつかなき」詠がそうであったように、問うたところで、その先には絶望しかないにもかかわらずその「宿世」をのぞき込まざるを得ない苦渋が初句の「おぼつかなき」には込められているはずである。その絶望を踏まえて下句を解するなら、「はじめもはてもしらぬ」とは、出自や今後の運命についての「分らない」という疑問の程度を超えて、「(知ったところで)どうする(と)もまきない」とでもすべきである。

さらに、「おぼつかなし」という感覚を散文中宇治十帖の結末まで辿ってみると、

『源氏物語』においても、薫詠「おぼつかなき」宿世の描かれ方の特異性が浮かび上がってくる。

#### 五 『源氏物語』宇治十帖における「おぼつかなし」——薫詠から浮舟物語へ

句宮巻以降には五十例の「おぼつかなし」の用例がある。主要登場人物の内「おぼつかなし」という感覚を持つ頻度としては、薫十四例、句宮八例、中君七例、浮舟三例、大君三例、という順で、数は開きがあるものの、薫は光源氏に次ぐ頻度で「おぼつかなし」と感じている。薫の「おぼつかなし」の感覚の方向としては、出生の秘密四例、大君五例、浮舟五例である。娘達への「ほだし」によって「俗聖」となっていた八宮は「おぼつかなし」と感じていないことに注目しておきたい。明石入道と異なり、八宮は「おぼつかなし」と感じる余地も残されていなかったということになる。宇治の姉妹には「この山里をあぐられたまふな(権本巻五—一八五)」という八宮遺詠による禁止事項だけがあって、予言譚における展望を残されていなかったのである。彼女達が八宮に対して「おぼつかなし」と感じるのは、その臨終に際して遺体と対面することすら出来なかった時の一回のみである。これは、前節で見た、一族に「宿世」を明かした明石入道の入山に際して、娘明石の君や妻尼君が繰り返した「おぼつかなし」と吐露していたのと対照的である。都から隔てられて

住まう彼女達は、訪れ間遠になる句宮や薫に対し「おぼつかなし」と感じることはあっても、自身の境遇や未来自体に対してはその感覚を表明しない。八の宮と宇治の姉妹の物語は、彼等の「宿世」の実現や、それに対して負った役割、それを賭けるに値する人物といった、その人の存在基盤となるものを主として描こうとするものではなかったと言えよう。

次に、「おぼつかなし」という感覚の対象となる頻度に視点を移すと、浮舟の一例が最も多く、これは正編における光源氏の二〇例に次ぐ頻度で、紫の上二〇例を超えている。他の人物、事象がそれぞれ五例を超えないことや、浮舟の登場期間を勘案すれば目立った特徴といえる。高橋亨氏に指摘されている浮舟の「存在の不安」は、他の登場人物からの「おぼつかなし」の感覚からも照射されてくる。

浮舟に対する「おぼつかなし」という感覚一六例中、十五例が浮舟の死(失踪)に対する不審に用いられているが、内、一例は浮舟自身によって用いられている。

からをだにうき世の中にととめずはいづこをはかど君もつらみむ

とのみ書きて出だしつ。かの殿にも、今はの気色見せてまつらまほしけれど、所どころに書きおきて、離れぬ御仲なれば、つひに聞きあはせたまはんこといとうかるべし、すべて、いかになりけむと、誰にもおぼつかなくやみなんと思ひ返す。

〔浮舟巻 六一—九四頁〕

「こまで見てきた平安文学に現れた「おぼつかなし」は、解消されないもどかしさを表明していたのに対し、浮舟は、自ら「おぼつかなくてやみなん」と願っている。「骸」さえも残さない、という徹底した「身」の消去を詠む浮舟独詠と結んで読むとき、彼女の「誰にもおぼつかなくてやみなん」という決意は、自身の存在性を消去しようとするものである。自ら、他に対して、或いは自己について「おぼつかなし」と感じるのではなく、他から「おぼつかなくてやむ」という有り方しか残されていないというところに彼女の「存在の不安」は根ざしている。源氏や明石の一族のように自らの宿世を「おぼつかなし」と展望する余地も持たず、また、薫のように「わが身」の過去と未来への「おぼつかなさ」を嘆ずることすらせず、その死すら他者から「おぼつかなし」とされる状態を願う、この用例は他に全く見ることのできないものである。平安期和歌に僅かながら類例を持つ、「身」の「おぼつかなさ」を詠んだ薫詠の発した自己の存在基盤への問いは、この浮舟の境地によって、無化される。つまり、「身」に対する「おぼつかなし」の感覚は、所詮、直面すべき危機から隔てられた安全な場所からの感覚であって、「身」の消滅をも覚悟する立場にたてば、逆に他から「おぼつかなし」と感じられることを願わねばならないのである。

そうした浮舟の願い通り、東屋以降、浮舟の存在は周囲の人物によって、最後まで「おぼつかなし」とされていくのである。

匂宮巻と結びつけて読むなら、「後の世をのみ契りし」も、一般的な自らの往生というよりは、本稿一節の匂宮巻の引用部分末尾「同じうは後の世をだに」と思ふ。かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすばはれてや、など推しはかるに、世を<sup>14</sup>かへても対面せまほしき心つきて、…(五―四頁)を想起させる。「はじめもはても」に輪廻転生の業を説く法文指摘する古注を一節で紹介したが、光源氏の息として現世に生きる限り決して解消されることのない薫の「おぼつかなし」という感覚は「後の世」にて母の安息を叶え、「世をかへ」父と対面することではか解消が望めなかったのである。「源氏物語」本文の異同の問題を含む「善巧太子」の典故は本稿では軽々に特定できないが、この薫の願望を抛り所に考えた時には、真の妻子であるということ<sup>15</sup>を証明する羅睺羅の物語より、父を求めて放浪する仏教説話の引用が相応しいように思われる。

夢浮橋巻末の浮舟の結論を先延ばしにした沈黙について、その曖昧ともいえるべき物語の終末の必然性については多くの宇治十帖論によって触れられている。また、その薫・浮舟をめぐる表現論にも卓見が提示されている。物語中最後に現れる「おぼつかなし」は、その「曖昧さ」を生のまま吐露した形容詞であるといえよう。

「ただ、かく、おぼつかなき御ありさまを聞こえさせたまふべきなめり。雲の遙かに隔たらぬほごににもはへるめるを、山風吹くとも、またも、かなら

大将殿も、なほ、いとおぼつかなきに、思しあまりておはしたり。道のほどより、昔のことどもかき集めつつ、いかなる契りにて、この父親王の御もとに來そめけむ、かく思ひかけぬはてまで思ひあつかひ、このゆかりにつけてはものをのみ思ふよ、いと尊くおはせしあたり、仏をしるへにて、後の世をのみ契りしに、心きたなき末の違ひめに、思ひしらすなめり、とぞおほゆる。

(蜻蛉巻 六一―三〇頁)

薫の浮舟失踪に対する「おぼつかなさ」は、八宮のもとへ通い始めた因縁へと一続きに続いている。八宮とその娘たちに出会い、宇治通いが始まった契機に思いを馳せた時、それは、弁の昔語りをも思い起こさせたであろう。この、八宮との出会いのきっかけである道心への傾斜も、冒頭で確認したように、自らの出自の環への恐れであった。「仏のしるへ」は、冒頭で引用した匂宮巻の「善巧太子」の仏典引用や、橋姫巻②の「仏にもこのことをさだかに知らせたまへ」と念じつる験(五―二六〇頁)を読者に回想させる。一見、物語がそれを語ることを放棄したかに見えた出生の秘事の主題、亡父への「おぼつかなし」の感覚が自らを宇治へと導き、浮舟に対する「おぼつかなし」に帰着したことが語り直されているのである。このベクトルに従い、冒頭に引用した薫独詠をめぐる言説を読み直してみよう。同様に、

ず立ち寄らせたまひなんかし」と言へば、すすろにお暮らさむもあやしかるべければ、帰りなんとす。人知れずゆかしき御ありさまをも見えなりぬるを、おぼつかなく口惜しくて、心ゆかずながら参りぬ。

(夢浮橋巻 六一―三九四)

小野の尼は沈黙した浮舟を「おぼつかなき御ありさま」と規定する。小君もまた宇治十帖冒頭の薫の出生に対する、そして浮舟失踪に関する「おぼつかなし」という感覚表現は、その「曖昧さ」を象徴している。そして、その「曖昧さ」は、存在感覚の不安定さを描く物語が必然的に選び取ったものであったといえよう。

正編の明石一族の物語とは異なり、宇治十帖の「おぼつかなし」は解消されることなく終わる。宇治十帖は、その始発に置かれた薫詠において存在性に疑問として投げかけられた「おぼつかなし」から、浮舟の「おぼつかなき」によって閉じられていると読むことが出来る。

先に拙稿にて、匂宮巻の薫詠と浮舟の「われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに(手習巻 六一―三〇三頁)」が、転生流転する生に対する「問い」と、憂き世に低徊し続けるしかない人間のあり方という「解」の関係にあることを、式子内親王詠「君ゆゑやははじめもはても限なきうきよをめぐる身とも成りなん(二六八)」を介して指摘した。匂宮巻薫独詠に込められた「おぼつかなし」の感覚が「転生」によってしか解消され得ないほどの絶望に満ちたものであることを

確認すると共に、「他者」ではなく、自らの存在に向けられた「おぼつかなし」の  
感覚もまた、薫の投げかけた「問い」に対する物語の「解」が浮舟のあり方によっ  
て示される、という、宇治十帖の方法の一例として指摘したい。

注

- (1) 後藤祥子『薫像試論 出生・道心・結婚観』『日本文学』一九七五・十一
- (2) 日向一雅『柏木遺文』『講座源氏物語の世界第八集』一九八三・六 伊藤博  
『薫論序説―柏木の遺影をめぐって』『源氏物語の探求九』一九八四・四 等
- (3) 三角洋一『源氏物語と天台浄土教』一九九六・十
- (4) 高木宗監『源氏物語における仏教故事の研究』一九八〇・六『人物で読む源  
氏物語 薫』さらに、上原作和注は、『古今物語集』巻五―三話の『善生太子』  
の父恋物語を指摘する。
- (5) 小林正明『宇治十帖の現在にかえて 悪の残照』『源氏物語宇治十帖の企て』  
関根賢司編二〇〇五
- (6) 『新編日本文学大辞典』「おぼつかない」の条。
- (7) しかし、契沖も「おぼつかなし」という語を一律に平安歌謡として『万葉  
集』の訓から排除してはいない。「おぼつかなきとは、癖の字をおぼつかなきと  
よめり。癖の字の心は、たとへはさかりにもゆる木を、灰の下にさしいれたるが、  
さすかにもえ出ねと、下にすすほるやうの心なり。春山の、陽気下にみちて、やゝ  
もえ出れと、猶くゆるやうなるを、むねにおもひのふさかりたるにたとへていふ  
なり。不審なるをも、おぼつかなしといへ」と、不審はせはく癖愠ひるし（『万葉  
代匠記』）

ぼつかなし」という感覚を持たない。薫から浮舟へと引き継がれ宇治十帖を一貫  
して覆っていた「わが身」への不安としての「おぼつかなし」の感覚は、薫の出  
生の秘密に根ざす宇治十帖独自の表現であるといえよう。

(17) 浮舟自身が他者に対して抱いた教示ない「おぼつかなし」の感覚は、母に  
対するものであるが、『山路の露』は、浮舟の近況を語り出すその始発に、「」は  
じめより、この子はごとの心知りためるを、なか母君には聞えざらん」などあ  
やしうおぼつかなし。(二六七頁)「まづ母君の御ことなん、おぼつかなきう悲  
しき。(二七〇頁)「と掬い取る。この浮舟の母に対する「おぼつかなし」とい  
う感覚が、夢浮橋巻では逢おうともしなかつた小君へ母への消息を託させ、彼女  
が振り捨てたはずの人々との再会の物語を導き出す。浮舟の母の側を描く際にも  
同様で、「骸をだにとどめずなり給ひしかば、いかでか。…おぼつかなきを添へ  
て、思ひ嘆き侍りし心の内、ただ推しはからせ給へ。(二九七頁)「と「骸をだ  
にとどめず…」という表現が蜻蛉巻での表現に合致し、意識的な『源氏物語』引  
用がなされている。この浮舟の意識の変化は、薫に対しても同様で、小野の訪れ  
た薫に恨みごとを告げられて、「あまりおぼつかなくならんも、あやしかりぬべけ  
れば、…(二八〇頁)「と、浮舟は和歌で答える。この心境はしごく常識的なも  
のではあるが、五節で指した「誰にもおぼつかなくてやみなん」という浮舟巻で  
の決意を思い返してみれば大きな変貌といえるだろう。宇治十帖の結末に集中し  
て現れ、「曖昧さ」を演出した浮舟への「おぼつかなし」が解消していくことで  
しか、薫と浮舟が再会を果たすという「結末」を語る物語は成立しなかったのは  
当然である。『山路の露』は、そのことを意識して「おぼつかなし」の感覚を引  
用しているのではないだろうか。

(18) 拙稿『源氏物語』浮舟詠「うき世の中にくめぐる」の解釈をめぐって『日  
本女子大学大学院の会誌』二〇一・三

引用した物語作中歌以外の和歌は全て『新編国歌大観』により、( )内に歌集

また、「癖愠」の語は他に、「いぶせし」という訓をもち、万葉研究において  
特に家持歌の特性として注目されてきた。例えば、五味智英氏は「はつきり心配  
事があつて心が晴れぬのではなく、理由もなくふさぎの虫に捉えられている」  
（『古代和歌増補』一九八七）としているが、これは薫の通うものがある。「い  
ぶせし」についても別稿を設け考察したい。

- (8) 小野寛「おほほし・いぶせし」考『論集十代文学』
- (9) 根来司『蜻蛉日記の表現方法』『解釈と鑑賞』一九七八・九
- (10) 金子真理子『蜻蛉日記』における「おぼつかなし」「はかなし」について  
『宇部国文研究』一九八九・三
- (11) 「おぼつかないつか晴るべきわび人のおもふ心やさみだれの空（堀川百首  
四四〇）夏十五 俊頼・千載集一七九」「おぼつかないかになるみのはてならむ  
行へもしらぬたびのかなしさ」千載集 五一八 下野国にまかりける時、尾張  
国なるみといふ所にてよみ侍りける 前中納言師仲 等。
- (12) 朝山信弥『多武峰少将物語の成立を中心として』『国語・国文』一九三六・  
二 木船重昭『宇治八宮の創造と造型―源氏物語の表現と方法』『国語と国文学』  
一九七六・十 洲江文也『源氏物語の思想的美質』『国語国文学研究叢書25』一  
九七八・五 新田孝子『多武峰少将物語の様式』第四章第一節一九八七・十二等。
- (13) 高橋亨『存在感覚の思想―浮舟』について『日本文学』一九七五・一  
一
- (14) 管見の範囲では多屋頼俊『宇治十帖の結末』『国語国文』一九四二・五 中  
村良作『夢の浮橋結末論』『国語国文』一九四三・七等が早い段階での指摘か。
- (15) 吉井美弥子『夢浮橋巻の沈黙』『中世文学』一九九〇・一 今井上「踏  
み惑う薫と夢浮橋―宇治十帖の終末についての試論』『中世文学』二〇〇一・一  
一等。
- (16) 『狭衣物語』の主人公狭衣は道心を志しながら恋の迷妄に陥る薫の人物像  
を継承したとされているが、狭衣は物語を通して自らの運命に対し、一度も「お

名と歌番号を付した。『文選』は『新釈漢文大系』、『菅家文章』は『岩波日本古  
典文学大系』、『多武峰少将物語』は笹川博司『高光集と多武峰少将物語―本文・  
注釈・研究』二〇〇六・一一、『蜻蛉日記』『源氏物語』『宇津保物語』は『小学館  
新編日本古典文学全集』、『山路の露』は『中世王朝物語全集』により、( )内に  
巻名と頁を記した。



表 『源氏物語』中「おぼつかなし」の感覚を抱いた人物とその対象  
 (一例以下は省略)

使用者 (回数)	対象 (回数)
光源氏 (42)	紫上 (9) 冷泉帝 (4) 末摘花 (4) 都・玉鬘・景色 (3) 葵上・朝顔・藤壺・女三宮 (2) 桐壺帝・夕顔・紫上祖母・六条御息所・朧月夜尚侍・明石の君・大宮・内大臣・明石の姫君・宿世・世間・女性達 (1)
薫 (14)	浮舟 (6) 出生の秘密 (4) 大君 (4)
桐壺帝 (9)	源氏 (6) 更衣 (2) 藤壺 (1)
明石の君 (9)	明石の入道 (4) 源氏 (3) 明石中宮 (2)
匂宮 (8)	中君 (3) 浮舟 (2) 宇治の姉妹・六君・若君 (1)
夕霧 (6)	柏木・落葉宮 (2) 六条院・紫上 (1)
中君 (6)	匂宮 (3) 八宮・大君・薫・弁の尼 (1)
紫上 (4)	源氏 (3) 明石の姫君 (1)
明石中宮 (4)	匂宮 (2) 明石の君 (1) 自分の出自 (1)
朱雀院 (4)	女三宮 (3)
浮舟 (3)	中君 (1)・母 (1)・自分 (1)
浮舟母 (3)	浮舟 (2)
柏木父母 (2)	柏木 (2)
大君 (3)	八宮・匂宮・薫 (1)
小野の尼 (2)	浮舟 (2)
小君 (2)	浮舟 (2)